

文化資本と社会階層

—文化的再生産論の日本的展開に向けて—

清水 亮

近年、階層研究はブルデューの議論に基づいた文化的再生産論に注目している。そして、いくつかの実証研究において文化的再生産論を日本に展開する試みがなされている。そこでは文化的活動と社会階層との関係が明らかにされているが、議論が社会的再生産のメカニズムとは結びつかない形で展開されている。この原因は偏に文化資本概念に対する検討が不十分であることによると思われる。本稿では文化資本概念の再検討を行うことによって文化的再生産論と社会的再生産論を接続させる視点を明らかにし、日本における実証研究の展開に向けて日本的な文化資本の仮説的検討を行うものである。

0 はじめに

1980年代以降、特に90年代に入ってブルデューの議論が注目され、これをもとにした文化的再生産論が展開されている。その議論の骨格を一言でいうならば、社会の階層的構造が文化を媒介にして再生産されているということになる⁽¹⁾。もちろん、ただ単に文化が階層ごとに分化しているという事象に対しては階級・階層文化の存在を指摘するという形で従来の議論でも言及されてきている。しかしながらブルデューの議論の新しさは、それまではむしろ政治や経済の残余カテゴリーとして扱われてきた文化の領域こそが社会の階層的構造を決める重要な要素である、としたことである。すなわち、文化を中心とした社会理論の構成というのがブルデュー独自の視角なのである。

こうしたブルデューの理論は、様々な領域の議論において言及されているが、とりわけ社会階層論及び教育社会学の地位達成研究において注目を浴びている。この研究は、諸個人の社会

的地位がどのような要因によって決定されるのかを探るものであるが、従来の研究で指摘されていた出身階層や学歴などの要因が具体的にどのように地位達成に影響しているのかを説明する理論としてブルデューの議論が参照されているのである。すなわち、SSM研究などで見られるこれまでの地位達成分析では、達成される地位を職業（現職あるいは初職）、出身階層を親の職業（父職）として変数化し、これに学歴を加えた上でパス解析等の統計的手法で諸変数間の関連を調べるという方法が採られてきた。そして、出身階層は職業達成をかなりの程度規定していること、出身階層が及ぼす影響は学歴を通しての間接的なものと、直接的なものが存在することが知見として得られている（盛山他[1990:35-41]など）。だが、なぜ出身階層と職業達成は一定の相関関係にあるのか、言い換えれば出身階層は具体的にどのように職業達成に影響を及ぼしているのかという問いに対しては、上記のような統計解析は何の答えも用意し

ない。そこで、こうしたデータを説明する理論が必要になるわけであるが、一方で文化的再生産論では、出身階層が規定する文化的な側面に着目して地位達成を説明している。ここに文化的再生産論による説明が一つの有力な説明として登場するのである。

こうしてブルデューの理論は注目を浴びるようになったわけだが、彼の理論を日本に導入しようという試みに対しては次のような批判が行われている。すなわち、ブルデューの理論は彼の研究フィールドであるフランス社会の現状を前提に組み立てられており、いわゆる「階級社会」というものを文化によって説明している。ところが、現代日本においては所得の平準化、中流階級化が生じており、階層が均質化している。こうした日本の現状に対して、ブルデューの理論はどこまで有効性をもつのか、という批判である(池田[1992:396-397])。しかし、SSM調査の結果が示すまでもなく、日本もまた階級・階層化された社会であることは間違いない⁽²⁾。したがって、ブルデューの示した社会理論の適用は十分に可能であると考えられる。とりわけハビトゥスや文化資本等の概念は現代日本における差異化・階層化を議論する上でも有効性を持つものであると考えられる。だが、その実証手続きに関しては慎重な検討が必要であろう。日本における文化的再生産論の実証研究では、基本的には「ディスタンクシオン」に示された趣味や文化的活動に関する分析を踏襲している。確かに日本においても趣味や好みに階級・階層が現れるという現象が見られるかもしれないが、果たして、そこで取り上げられた趣味や文化的活動が社会の階層構造を生産・再生産する主要な要素として機能していると言えるのであろうか。もしそうでないとしたら、趣味や文化的活動の分析に力を入れても社会におけ

る階層構造の再生産の過程を動的に捉えようとする作業には結びついてこなくなるのである。

本稿では、まずブルデュー理論の基本的概念の要点を整理する。次いで、日本における文化的再生産論の実証研究が社会的再生産の議論と乖離してしまっている実態を指摘する。そして、文化資本概念を再検討することで、文化的再生産論を社会の階層構造の再生産の議論と結びつける可能性を提示し、最後に日本における文化的再生産論の実証手続きとして、有効性の高い文化資本の検出に関する仮説的検討を行う。

1 プラティーク・ハビトゥス・文化資本

議論を展開するにあたって、もう少し詳しくブルデュー理論の中味を見ておく必要がある。それには、彼独特の概念装置であるプラティーク・ハビトゥス・文化資本を理解しておかなければならない。まずはこれらの三つの概念の要点並びにそれらの関係を示しておこう。

[プラティーク(pratique)]

ブルデューは、人々が普段何気なく行っている日常的・慣習的な諸々の行為・行動をプラティークと呼ぶ。その内容は、例えば宗教活動だとか政治的立場の選択、食べ物の好み、趣味、つきあい、さりげない仕草や立ち居振る舞い、物事の認識の仕方、発想や思考法等々、きわめて広範に及んでいる。そして、行為者の主体的意志の積極的関与を必ずしも前提としないことをその特徴としている。すなわち、「プラティークがハビトゥスに基づく」というとき、それは意識的であろうと無意識的であろうと、行為・行動が本人のハビトゥスによって否応なしにある一定の方向へと導かれていくということを指しているのである。こうしたプラティーク概念の有効性は、個人が行う複数の行為をそれぞれ独立した一回性のものとして扱うのではな

く、それらの間に存在する一定のパターンを把握するという点にある。そして、そのパターンを複数の個人間に見い出すことによって、プラティークの階層性を捉えることができるのである。

[ハビトゥス(habitus)]

一方、ハビトゥスとは人々が内面化しているディスポジション(disposition: 「性向」とも訳される)の集合としてのシステムである。ディスポジションとは行為者を取りまく客観的な社会的条件(地位・職業・学歴等)が内面化され、身体化されることによって形成された主観的な行為の方向づけであり、したがって行為(プラティーク)という個人的な営為を社会的諸条件に適応させる働きを持っているものである。このディスポジションは各行為を個々別々にそれぞれの方角へと導くものであるが、相互に無関連に行為を規定しているわけではない。それらはお互いに連動しながら全体として一つの色調を構成している。そうしたディスポジションの総体がハビトゥスなのである。ここで重要なのは、ハビトゥスが人々の生きてきた社会的条件によって、言い換えれば過去の諸経験に基づいて形成されるということである。経験に従うということは、大まかに言って似たような経験をしてきた者同士は似たようなハビトゥスを形成するということである。ハビトゥスが個人に内面化されているものでありながらも、個人を超えた階層性をもっているというのはこうした理由によるものである。

[文化資本(capital culture)]

次に文化資本について見ておこう。文化資本とはハビトゥスを作り出すための環境的条件のようなものである。この概念は言うまでもなく経済学用語であるところの「資本」概念を拡張したものであり、したがって資本である以上、

新たな富(=利益)を生み出すことを期待された富の一種である。そして、ブルデューによれば①身体化された文化資本(知識・能力・技術など)、②客体化された文化資本(書籍・レコード・絵画など)、③制度化された文化資本(学歴・各種ライセンスなど)という三つの形態に分類される。これらはいずれもハビトゥスの形成に一定の役割を果たすものであり、このハビトゥスを媒介にして諸行為に影響を及ぼす。したがって、利益に結びつく行為を生み出すような文化資本ほど価値が高いものと見なされることになる。ここに文化資本の獲得をめぐる闘争が発生するわけである。

それぞれの概念を簡単に記せば以上のようなものであるが、これらの概念の関係をまとめると次のようになっている。文化資本の配分構造、言い換えれば文化資本の階層性に対応してハビトゥスが形成される。階層化されたハビトゥスに従って諸々の行為が行われる。そうした階層化された行為に対して社会的判断・評価が下され、人々はそれぞれの社会的地位(階層)へと配分されていく。配分された各社会的地位には一定の文化資本が対応しており、再びそれに応じたハビトゥスが形成される…。すなわちこうした循環的な過程を経て、社会の階層的な構造が再生産されていくというわけである。このように、ブルデューの理論はハビトゥス・プラティーク・文化資本といった独自の概念を駆使しつつ、全体として社会の階層的構造の再生産メカニズムを示している。そして、この基本的な枠組みのもとに、教育論やディスタンクシオンの議論、あるいは芸術論など、幅広い議論を展開しているのである。

2 日本におけるブルデュー理論の受容

ブルデュー理論の最大の特徴は、前述のよう

にハビトゥスや文化資本といった文化的な要素を中心に据えて社会を語ったことにある。この理論がこれほどまでに言及されているのは、文化が社会を規定しているという語り口の新鮮さによるものであろうが、同時にそれは従来の職業中心主義的な階層論が現代において十分な説明力を持ちえなくなったという感覚の裏返しでもある。実際、SSM研究のなかでも、職業にかわって生活様式や消費スタイルによる階層分化が重要性を増しつつあることが指摘されている(盛山他[1990:45])。

とりわけ1980年代に入って、職業にかわる新たな階層分化の軸を捉えようとする一部の階層研究者にとってはブルデューの理論はきわめて魅力的なものとして映った。すでに70年代の後半から、日本社会は中流意識の増大や地位の非一貫性が強まるといった現象が見られ、「階層が平準化した」であるとか「階層が見えにくくなった」と言われるようになった。一方で、受験戦争の過熱や個性的なライフスタイルの追求など、新たな階層の分化が生じているという指摘が行われ、ここに新たな階層把握のあり方が模索されることになる。こうして、文化によって階層を把握するブルデューの理論が、行き詰まった階層論の出口として脚光を浴びたわけである。

このような背景のもとにブルデュー理論は日本に導入されたわけであるが、その受容の仕方を概観すると、そこには同じ文化的再生産論の名の下に二つの異なった問題関心が混在していることに気づく。一つは社会の階層的構造の再生産メカニズムを文化資本やハビトゥスといった側面から解明していこうというものであり、もう一つは文化の階層的構造が社会階層と結びつきながら再生産されていく過程を明らかにしようというものである。前者の研究は主に地位

達成過程の問題として議論されており、いくつかの実証研究によって文化資本と地位達成との関係を明らかにする試みがなされている。例えば、宮島・田中[1983]は女子高校生を対象に調査を行い、出身家庭が保有している蔵書・レコードの種類や量、親の文化的活動といった文化的環境要因が本人の進学アスピレーションなどにどのように関わっているのかを分析している。また、藤田他[1987][1992]は大学生を対象に調査を行い、言語能力の程度や文化に関する知識の量が所属する大学の入試難易度ランクといかに関連しているかを調べている。これらはいずれも文化資本の保有状況、言い換えれば文化資本の配分に基づく文化的階層が現在及び将来の地位達成にどのような影響を及ぼすのかという視点に立った研究である⁽³⁾。

一方、後者の研究は人々の文化的活動が出身階層によって規定されていることを実証し、さらに諸々の文化的活動が社会においてどのような位置づけにあるのかを探ろうというものであるが、これは文化研究の一環として位置づけることができる。例えば前出の藤田他[1987][1992]ではいくつかの文化的活動を取り上げて、その活動内容が出身階層によって異なることを示している。そしてそれらの活動の上品度を判断してもらい、その結果から芸術的・教養的活動・大衆娯楽的活動といった文化的活動の構造を析出している。また、片岡[1991][1992]も文化的活動と出身階層(父職)、学歴、職業等の関係を共分散構造分析(LISREL)を駆使しながら解明しようとしている。

両者はともに議論の中で文化的階層を扱っていながらも、上述のようにそれぞれ全く違った問題関心に基づいている。すなわち、いずれの議論も文化資本の保有量を説明項の中心に置い

ているが、前者は地位達成を説明しようというものであり、後者は文化的諸活動を説明しようというものである。もともとブルデューの議論においては、出身階層の家庭環境的要因が本人の文化的な活動や文化に関する知識といった文化資本に結びつき、それが資本として有効に機能することによって、社会的な地位達成の場面において有利に働くという筋になっていた。つまり、地位達成と文化的活動とはきわめて密接に結びついていたのである。だからこそ上層階級の子弟が学校成績の面で有利に展開しているという現象を学校文化と上層階級文化との連続性によって説明したのである。ところが日本の研究においては地位達成的研究と文化的活動研究とがうまく結びつかないままに併存し、問いとして互いに独立したものになってしまっている。この原因は、これらの研究においては文化資本概念に対する理解が十分でなく、それゆえ実証研究の場で取り扱われるべき文化資本が必ずしも適切なものではなくなってしまうことによると考えられる。そこで、次に文化資本概念の再検討を行うことにする。

3 文化資本概念の再検討

先にも述べたように、文化資本は資本の一種であり、それを元手にしてより多くの利益を獲得することを期待されたものである。したがって、文化資本の資本としての価値は、将来獲得する利益の期待値によって決まってくる⁽⁴⁾。

もし、文化資本概念に価値という視点、あるいは利益との結びつきという視点がなかったならば、文化資本と呼ばれるものは従来通りに「能力」だとか「財」として扱えば十分である。それを敢えて資本と呼ぶのは、経済学用語の「資本」と同様の性質をそれらに見い出しているからにはほかならない。そして、その性質とは

蓄積・投資・贈与（相続も含む）などの操作が可能であるということであり、とりわけ投資によって価値増殖が可能であるということである。周知の通り、マルクスは『資本論』において資本について広範な議論を展開しているが、そこで示された最も基本的な枠組みは、貨幣→生産手段→商品→貨幣という循環の中で価値増殖が行われる資本の運動形態であった(Marx [1894=1969 I: 255-271])。すなわち、資本というのはこうした循環運動の中で不断に価値増殖を続ける存在として概念化されているのである。ブルデュー自身はこのことを必ずしも明示的に述べているわけではない。だが、彼が文化資本概念を導入したのは、学歴達成における出身階層間格差の存在を家庭内の教育過程によって説明しようとしたからであり、それも人的資本論が取り扱っていない金銭換算が不可能な教育投資を考慮に入れようとしたからである(Bourdieu [1979b=86:18-19])。ここには明らかに、学歴達成という利益に結びつく存在として、それも経済資本とは異なった存在として文化資本を捉えようとする視点が見られる。

もちろん文化資本における蓄積・投資・贈与・相続といった操作のあり方は、経済資本のそれと厳密な意味で同じというわけではない。例えば、金銭の場合は投資をすると現物は手元には残らないが、言語の場合はそれをいくら“投資”しても言葉が使えなくなるわけではない。また、教育という形で知識を“贈与”しても、教育を施した側の知識はゼロになるわけではない。しかしながら、そうした厳密な意味での違いを乗り越えて、利益を生み出す元手であるという点において文化資本もまた資本なのである。そうすると、文化資本固有の価値増殖が一体どのように生じるのかが問題になってくる。

地位達成過程における最も典型的な文化資本の価値増殖プロセスは以下のようなものであろう。まず、家庭において言語能力（＝言語資本）を身につける。次にこれを元手にして諸々の知識・能力・技術（＝身体化された文化資本）を手に入れ、さらにそれらを用いて学歴やライセンス（＝制度化された文化資本）を取得する。そして、これらの諸資本を総合的に評価してもらうことによって職業（＝社会的地位）に就き、所得（＝経済資本）を得る。場合によっては学校において知り合った友人（＝社会関係資本^⑤）が職務遂行上のコネとなって大きな仕事を成功させ、信用・賞賛・昇進・昇給などの諸利益を獲得するかもしれない。このような過程のなかで、それぞれの文化資本を獲得したり、あるいは獲得しなかったりすることで、全体としての階層分化が生じてくるわけである。

このように、文化資本は様々な利益と結びつくことで価値を増殖させる。そして獲得した利益がまた資本となってさらに新たな利益と結びついていく。こうして雪だるま式に利益が増えていくのである。逆に言うと、文化資本は他の文化資本や経済資本と結びつきうる存在として捉えることができる。そもそも経済学用語における資本というのは「G（貨幣）→W（商品）→G'（貨幣）」という過程の中で増殖するもの、あるいは価値増殖すると期待されるものことである。こうした資本の運動は社会の至るところで何度も何度も繰り返されており、そのため利益を生み出すのが当然視されるようになっている。そうなると、資本それ自体に価値増殖の能力が内在化されているかのような“見なし”が行われるようになる。これが資本の持つ信用性である。資本の増殖が既成化された社会においては、資本に二重の価値付与がなされる。すなわち、投資時点における価値と、将来増殖し

た時点の価値とが同時に資本に内在していると見なされるのである。だからこそ、資本には将来の利潤を担保にした信用が与えられるのであり、その獲得をめぐる闘争が展開するのである。このことは文化資本においても同様である。したがって、将来の利益獲得を内在化していると思なされるもののみが資本として認識されるのであって、利益の獲得に結びつかないようなものは文化資本とは言えないのである^⑥。

4 文化的活動分析批判

繰り返しになるが、ブルデューが『ディスタクシオン』で行った趣味分析は、日本においてはそのまま文化的諸活動の分析という形で展開している。そこでは文化的諸活動がいかに関文化資本の保有量や社会的地位によって規定されているかがデータによって示されている。

しかしながら、これらの研究は以下のような問題を抱えている。それはまず第一に、文化資本の測定問題である。そして第二に、議論の対象とすべき文化資本の具体的内容をどのようにして選び出せばよいのかという問題である。

まず第一の問題から考えてみよう。文化資本は前述の三つの形態に分類されるが、客体化された文化資本と制度化された文化資本はある程度測定が可能である。客体化された文化資本は物的な対象を伴っているために可視的なものであるし、また制度化された文化資本は学歴・ライセンスなどの形で外部からの認識が可能である^⑦。これに対して身体化された文化資本は知識や技術、あるいは能力といった形で文字通り身体化されているために、そのままでは外から測ることができない。したがって、この形態の資本は知識・技術・能力が実際に活用され、発揮された結果をもって間接的に測定するしかない。実際、試験というのはこの身体化された文

化資本を間接的に測定する最も典型的な方法として広く行われている。

このような困難を伴いながらも部分的・間接的に文化資本の保有量を測定することによって、文化資本の所有をめぐる階層分化の実態を調べることができる。すなわち、出身家庭における文化資本の保有量が地位達成や文化的諸活動にどれだけ影響を及ぼしているかを探ることができるわけである。しかしながら実際には、経済資本と違って文化資本の量は正確に把握することはできない。例えば前出の宮島・田中[1983]の調査では蔵書量とレコード所蔵量とをジャンル別に測定しているが、小説と政治・社会系の書籍、あるいはクラシックと歌謡曲のレコードのどちらがより資本としての価値が高いのかははっきりしない。また、蔵書100冊・レコード10枚のケースと蔵書10冊・レコード100枚のケースとではどちらが資本として価値が上なのかはわからない。すなわち、文化資本といってもその中味にははっきりとは比較できないものが混在しているのである。当然のことながら、経済資本ではこのような問題は起こらない。経済的な価値は貨幣という尺度によって一元化されており、質的に異なるものであってもこのスケールによって比較が可能だからである。文化資本の測定が容易でないのは、制度的に一元化されたような尺度が存在しておらず、価値判断の基準が必ずしも人々によって一元的に共有されていないからである。だからこそ書籍とレコードとが質的に異なるものと認識され、客観的視点からの量的比較が困難になるのである⁽⁸⁾。それでも全く文化資本の価値序列が存在していないというわけではない。社会全体としては文化資本の価値序列は存在していると考えられる。藤田他[1987:67-72]における文化評価スコアの測定などはこうした価値序列の一面を

捉えようとしたものである。だが、これも主観的な「上品度」を尋ねて総和をとったものにすぎない。

このように文化資本の測定がきわめて困難でかつその内容が曖昧なものになっているのは、形態上の不可視性の問題を除けば、文化資本概念に対する理解の不十分さに起因しているといえる。つまり、社会的に成立している文化資本の価値序列は、単純に主観的な価値序列の総和で測られるものではなく、あくまでどれだけ多くの利益をもたらしうる存在なのか、どれだけ他の文化資本・経済資本と結びつく存在なのかによって測定されるべきものなのである。個人の保有する文化資本の量も、こうした社会的な価値序列に照らして測定する必要がある。

次に第二の問題を考えてみよう。文化資本の測定を試みた調査研究においては測定される文化資本は研究者の判断によって予めいくつか選ばれているが、たいていの場合その選択は他の様々な文化資本・経済資本との結びつきやすさという基準を満たしていないように思われる。この類の調査は主に文化的活動の階層性を実証するという問題関心のもとで行われているので、美術館等の上流文化的活動への参加の度合いやピアノの所有、あるいはクラシック音楽の鑑賞など、文化的活動を規定しそうな文化資本に最初から限定されている⁽⁹⁾。だが、そこでとりあげられたものが本当に資本としての有効性が高い文化資本なのだろうか。とりわけ地位達成の視点から見た場合、どれだけ有効な資本と言えるのだろうか。ピアノの例で考えてみよう。

ピアノという文化資本は確かに音楽に関する知識・能力・技術などを高め、将来において音楽に関する諸活動を行う方向に導く可能性を持っている。その意味で音楽的なハビトゥスを規定するものと言える。だが、出身家庭において

ピアノを所有していることが他の文化資本や経済資本の獲得に直接的に結びつくということは、プロの音楽家でもない限りそんなに頻繁にはないだろう。仮に、ピアノの所有がある社会的地位を達成することと相関があるとしても、ピアノそれ自体やピアノから形成されたハビトゥス、あるいはピアノで得られた知識・能力・技術などが地位達成を規定しているとは考えにくい。それは、ピアノを所有するという行為を導いたハビトゥスが、ある社会的地位の達成に向かわせる傾向を同時にもっていると考え方が妥当な解釈であって、ピアノと地位との間に生じた相関はそうしたハビトゥスの仕業であると考えられるのである⁽¹⁰⁾。

このように、文化資本の測定といっても、その具体的内容は資本としての価値の高さに対する考察が十分なされないままに研究者自身の判断によって選択されている。そして、文化的活動の研究の際には特にそれらと関係のありそうなものに選択が限定される傾向がある。しかしながら、文化資本は先に述べたように様々な利益、他の文化資本や経済資本と結びつきうる存在として捉えられるものである。とりわけ地位達成との関係から言えば、ピアノの有無が価値の高い文化資本として機能しているとは考えにくいのである。こうした意味において、従来扱われてきた文化的活動は、それ自体日本においてはそれほど資本として有効性の高い文化資本ではないと思われる。つまり、美術館に頻繁に通おうと、クラシック音楽を好もうと、そうしたことが新たな利益を創出するきっかけになることはあまりないのではないだろうか。確かに美術館通いをしてクラシックを好むような人々に対しては、趣味がよいという評価が下されるかもしれない。また、そうした「正統文化的活動」が自己イメージの呈示として他者との差異

化に用いられたい、個人的ネットワーク（社会関係資本）の形成に役立つこともあるだろう。けれども、だからといってそのことを理由にその人物を全面的に信用し、何らかの資源配分を行うということが頻繁にあるわけではなからう。このように考えてくると、文化的活動は地位達成の視点から見ると重要な文化資本とは考えにくいのである。だからこそ文化活動研究はブルデュー理論の実証の一端を担いながらも、社会の階層構造の再生産の議論に結びつかないのである⁽¹¹⁾。

結局、文化的活動研究は文化的活動がいかに階層と結びついているかを示しているにすぎないのであって、それ自体は社会的再生産論には展開しにくいものとなっている。その意味でこの研究は階層研究というよりは文化研究として位置づけられるのである。

5 日本における有効性の高い文化資本—その検出に向けての仮説的検討—

さて、これまでの展開から明らかになったのは、文化資本は他の文化資本・経済資本との結びつきによって価値序列が決まってくるものであり、社会的再生産を論じるためには地位達成過程において資本として有効な文化資本を議論の対象として扱わなければならないということである。では一体どのような資本が資本としての有効性が高いのであろうか。

なお、ここでは当面、地位達成を初職への参入過程に限定しておく。これは、社会的地位をどのように概念化するかという問題がそれ自体多分に論争的で容易に論じることのできない問題であるので、とりあえず議論を単純にするための限定である。

現代日本においては職業達成は学歴によって強く規定されていることが知られている(菊池

[1990:16])。職業的地位へ人々を配分していく場面においては一定の知識・能力・技術などをどれだけ身につけているかが評価基準として設けられるが、学歴はそれらの総合かつ簡便な指標として用いられるわけである。そうすると学歴取得を規定する文化資本が職業達成に結びつく価値の高い文化資本ということになる。

念のため学歴と経済資本との結びつきについて言及しておく、ある程度裕福な家庭ほど高い学歴の取得が有利に展開すると考えられる。学歴取得には何といても学校での成績がものをいうが、成績達成には学校外教育投資を含めた総合的な教育環境の整備が必要であり、それにはどうしても一定の経済的負担が伴うからである。けれども日本には公教育の制度が確立しており、経済的な理由によって教育が受けられないことのないような工夫も施されている。したがって、成績を規定している要因を経済的な要因にのみ求めることはできないのであって、同時にそれ以外の要因の存在も考えなければならない⁽¹²⁾。

一般に、学校での成績評価は試験の得点によって行われており、その試験が要求しているのは学校で習う知識である。この知識はそれが試験に出されるというだけで資本としての高い価値を持っており、日常生活を営んでいく上での知識とは独立した存在である。すなわち学校的知識は、歴史の年号に見られるように、それを知らなくても生活できるという意味で「使用価値」はそれほど高くない。だが、学校という「市場」ではまさにそれが成績評価の基準なのであって、そこでは学校的知識は高い「交換価値」をもつ資本として流通している。しかも、それらは成績という形で資本の量が測定され、相応の学歴資本に交換（転換）された挙げ句、最終的には職業にまで交換（転換）されるので

ある。このような学校的知識は、その「使用価値」の低さから日常生活にはほとんど直接には登場せず、したがって生活の中で自然に習得することはできない。つまり、努力や勤勉を通してはじめて獲得されるのである。この日常生活からの独立性はいわゆる「必要性からの距離」といわれるものであるが、学校的知識の習得に必要な努力や勤勉といったハビトゥスに対しては出身家庭の環境的要因が大きな影響力を持つと考えられる。

この説明形式は学校文化と上層階級文化との連続性によって出身階層と学業成績との相関を示したブルデューの議論とまさに同型であるが、問題なのはここでの「文化」の内容である。ブルデューの「ディスタンクシオン」における分析では、様々な文化的プラティークが学歴や出身階層といかに密接に結びついているかが示されており、同時にそうしたプラティークによって自らの卓越化が果たされる有り様が描き出されている。そこには、そこで取り扱われている文化的な活動がまさにその人物を（社会的に）評価する基準として一定の役割を果たしていることが前提とされている。しかしながら、日本の現状を考えるとこの前提には懐疑的ならざるをえない。少なくとも日本における学校文化の内実はクラシック音楽を聴くといった類の文化的活動と連続的であるというよりも、主要科目と呼ばれる教科の知識を中心に構成されていると言える。そして試験で要求されるのはそうした学校的知識である。竹内[1991:164-166,189]によれば、確かに日本でも旧制高校の教養主義などには上層階級的な文化との連続性が見られるという。そして高等教育機関は西洋のブルジョワ文化を正統なる文化と認定する装置として機能したという。しかし、現代の大衆化された大学ではもはや教養主義的な志向はほぼ消滅して

おり、学校的知識の獲得作業の如何によって成績が左右される度合いが強くなっている⁽¹³⁾。そうなってくると知識獲得作業を規定する文化資本が重要な位置を占めることになる。

学校的知識の獲得作業には一定の言語資本やアスピレーションが必要とされる。なぜなら、これらの知識は日常生活で最も頻繁に用いる言語とは異なった言語によって構成されているからであり、また「必要性からの距離」が遠いために敢えて意味を見出さなければ習得には向かわないからである。ただし、この作業に関わってくる文化資本はあくまでも条件として働くにすぎず、実際に知識獲得作業を産出するのはハビトゥスの仕業である。そして、このハビトゥスは真面目さや努力・勤勉といった傾向、あるいはそれらに加えて知的柔軟性や自立性⁽¹⁴⁾などと密接な関係があることが予想される。こうした言語資本やアスピレーション、あるいは知識獲得作業へ向かわせるハビトゥスは、例えば親の言葉遣いや子供への期待、躰といった出身家庭の環境的要因によって直接的に規定される度合いが強いものと考えられる。したがって、社会的地位の世代間再生産といわれる現象は、このような出身家庭の環境的要因という形で資本の継承が行われるという事態によって説明できるのである。

6 結論

以上述べてきたように、文化的再生産を社会構造の再生産と結びつけて論じる限りにおいて、文化資本はきわめて重要な位置を占める概念である。そして、それを資本として概念化するということは、諸々の利益と結びつく可能態として捉えることである。しかしながら、文化的諸活動と出身階層との間に相関を見出すことによってブルデュー理論の実証を行っている

一部の文化的再生産論者は、彼らを取り上げている文化的活動が日本においては必ずしも資本としての有効性が高くないことに気づいていない。これによって文化的活動研究が社会の階層構造の再生産の議論に結びつかなくなってしまった。これを再構成し、文化的再生産論を社会的再生産の議論と結びつけていくためには、資本としての価値が高い文化資本を分析の対象に取り上げていき、両者の関係を解明する作業を行わなければならない。それには文化資本の価値序列が予めわかっていることが前提となる。そこでまずは、現代日本社会において成立しているそうした価値序列を解明していくことが必要となる。しかる後にはじめて日本の文化的再生産論は社会的再生産の議論を内包することができるのである。

註

- (1) 正確に言えばブルデューの議論は文化的再生産論と社会的再生産論とによって構成されている。文化的再生産論は文化の階層的な構造が再生産されるメカニズムを論じたものであり、社会的再生産論は社会の階層的な構造が再生産されるメカニズムを論じたものである。そして、両者はその共犯関係によって互いの正統性を保証しあう関係にある。日本において一般に文化的再生産論という場合、これらの議論を全て含んだものを指すことが多いので、本稿でもこの語の用法はこれに従うものとする。
- (2) SSMの75年データと85年データとを分析した鹿又[1990:165-166]によれば、85年時点までは全体として階層の平準化や平等化が進んでいるという。しかし、平準化や平等化の進展は不平等の軽減に関する程度問題であって、不平等の存在それ自体を否定するものではない。実際、資源分配の格差

や地位達成における親世代の影響が依然として存在していることは鹿又自身も認めている。

- (3) 地位達成研究は基本的には職業達成を念頭に置いていると言えるが、職業達成過程における学歴の重要性を考慮すると、ここで挙げた学歴達成を扱った研究も広義の地位達成研究の一環として捉えることができる。
- (4) ここでいう利益とは経済的な利益だけを指すのではない。本稿においては直接金銭に換算可能な利益のみならず、威信・信用の獲得や新たな友人関係の形成などもまた利益と考えるような広義の利益概念を想定している。
- (5) 社会関係資本(capital social)というのもブルデューの独自の用語であり、平たく言えば人間関係のことであるが、資本と名の付く以上、その人間関係が存在することで何らかの利益が見込まれるような場合にのみ概念化されるものであって、いわゆる「コネ」・「人脈」などがこれにあたる。諸々の「関」も典型的な社会関係資本である。詳しくはBourdieu[1980b=86]を参照。
- (6) ここでの利益は根底的には人々の主観的な価値序列に依拠して決まってくるものである。だが、その主観的な価値序列が社会的に成立している価値序列と一致しない場合には、たとえ主観的に価値の高い文化資本であっても他の文化資本・経済資本と結びつきにくくなってしまふ。なぜなら、文化資本の交換・転換は社会的な価値序列に従って行われるものだからである。逆に両者が一致する場合には、文化資本の獲得作業への動機づけが一層強化されることになる。例えば一定の知識・能力・技術を有していることはそれ自体でも主観的には十分な価値を認められることであるが、それに制度的な資格が賦与されることによって社会的にも価値を認められることになる。そしてそのことによって初めて職業的地位の獲得などの他の文化資本・経済資本との結びつきが広がるのであ

る。

- (7) もっとも、客体化された文化資本とされる書物・レコード・絵画などの対象物が実際に文化資本として機能するかどうかは、それらを読み、聴き、鑑賞する能力という身体化された文化資本を保有しているかどうかにかかっている。それらの物的な対象物は身体化された文化資本を伴わない場合はまさに「猫に小判」の状況であり、文化資本としての意味をなさない。制度化された文化資本はある特定の能力や技術を保有していることを制度的に保証するものであり、言い換えれば特定の身体化された文化資本を外部から見えるようにしたものである。
- (8) ブルデュー自身は文化資本を測定する尺度として最も不正確でないのは獲得時間を測定基準にしたものであると述べている(Bourdieu [1979b = 86 : 21])。しかしながら獲得に要する時間が多く必要なほど価値が高いとしてしまうのでは、利益との結びつきが全く保証されないことになってしまうことになる。また、彼自身も同じところで時間を尺度にしたときの問題点を認めている。
- (9) 美術館等の上流文化的活動への参加やクラシック音楽鑑賞などは形態上はブルデューの挙げた文化資本の三形態に合致しないが、片岡[1992]では「文化的環境」の中にこれらを含めている。
- (10) 確かに、ピアノの所有やある種の文化的活動の頻度を調べることで、その人物がどのような社会的地位に結びつくハビトゥスを有しているかを間接的に捉えることができるかもしれない。そして、ハビトゥスという不可視なものを可視化するには、そうした操作的な作業が必要であることも事実であろう。しかしながら、文化的活動と社会的地位との間に相関が見られるとしても、前者が後者を規定しているという関係が示されない限り、文化的活動が地位達成過程の上で資本として機能しているとは言えない。したがって、地位達成を

導く諸行為を規定するハビトゥスを捉えるためには、あくまでそのハビトゥスの形成に直接的に関わってくる文化資本を探索し、その所有状況を調べる必要があるのである。

- (11) 藤田他[1992:61-63]では測定する文化資本に日本的な要素を取り込む工夫がなされているが、結局そこで扱われている内容も日本古来の伝統芸能に関する知識などであって、それらがいかなる意味で資本としての価値が高いのかという議論は残念ながら行われていない。
- (12) 「親の社会経済的地位→学校外教育投資→学力・進学先高校」という因果連鎖が成立していないことを示した研究もある(盛山・野口[1984])。
- (13) 日本の場合、上層階級の文化は自生的なもの

ではなく、ほとんどが西欧文化であった。そして学校がその伝播装置となったため、それだけ学歴が民衆との差異を際立たせる指標として注目されるようになった。竹内はここに「学歴社会」の成立を見ている。だが同時に彼は次の指摘も行っている。すなわち、学歴取得はかつては努力奮闘の末に教養を獲得するという営為であったが、努力と勤勉という近代日本人のエートスが価値ではなくなるにつれて受験は「暗号解読競争」化した。これによって、学歴取得は単なる知識獲得作業になってしまったのである(竹内[1991:175-182])。

- (14) 知的柔軟性や自立性についてはKohn & Schooler[1983]、吉川[1992]、白倉[1993]等を参照。

文献

- 秋永雄一：1991、「文化のヒエラルヒーと教育の機能」, 宮島喬・藤田英典編, 『文化と社会—差異化・構造化・再生産—』, 有信堂
- Bourdieu, P. : 1979a, *La distinction* = 1989, 石井洋二郎訳, 『ディスタクシオン I』, 新評論 / = 1990, 『ディスタクシオン II』, 藤原書店
- : 1979b, "Les trois états du capital culturel" = 1986, 福井憲彦訳, 「文化資本の三つの姿」, 福井憲彦・山本哲士編, 『a c t e s』No.1, 日本エディタースクール出版部
- : 1980a, *Le sens pratique* = 1988, 今村仁司他訳, 『実践感覚 1』 / = 1990, 『実践感覚 2』, みすず書房
- : 1980b, "Le capital social : notes provisoires" = 1986, 福井憲彦訳, 「社会資本」とは何か—暫定的ノート」, 福井憲彦・山本哲士編, 『a c t e s』No.1, 日本エディタースクール出版部
- Bourdieu, P. & Passeron, J. C. : 1964, *Les héritiers*, Les Edition de Minuit.
- : 1970, *La reproduction* = 1991, 宮島喬訳, 『再生産』, 藤原書店
- DiMaggio, P. : 1982, "Cultural Capital and School Success : The Impact of Status Culture Participation on the Grades of U. S. High School Students", *American Sociological Review* Vol.47
- 藤田英典・宮島喬・秋永雄一・橋本健二・志水宏吉：1983, 「文化の階層性と文化的再生産」, 『東京大学教育学部紀要』第23巻
- 藤田英典・宮島喬・加藤隆雄・吉原恵子・定松文：1992, 「文化の構造と再生産に関する実証的研究」, 『東京大学教育学部紀要』第32巻
- 橋本健二：1988, 「文化評価の構造と文化の階層性」, 『静岡大学教養学部研究報告 人文・社会科学篇』第24巻第2号

- 池田寛：1992, 「書評：『文化と社会—差異化・構造化・再生産—』, 日本教育社会学会編, 『教育社会学研究』第50集
- 石井洋二郎：1993, 『差異と欲望—ブルデュー『ディスタンクシオン』を読む—』, 藤原書店
- 鹿又伸夫：1990, 「不平等の趨勢と階層固定化説」, 直井優・盛山和夫編, 『現代日本の階層構造①—社会階層の構造と過程—』, 東京大学出版会
- 片岡栄美：1991, 「文化的活動と社会階層—現代女性における文化的再生産過程—」, 『関東学院大学文学部紀要』62号
- ：1992, 「社会階層と文化的再生産」, 数理社会学会編集委員会編, 『理論と方法』Vol.7 No.1
- 吉川徹：1992, 「社会階層と「自己—指令的」態度の形成」, 『ソシオロジ』第37巻1号, ソシオロジ編集委員会
- 菊池城司：1990, 「序論：現代日本における教育と社会移動」, 菊池城司編, 『現代日本の階層構造③—教育と社会移動—』, 東京大学出版会
- Kohn, M. L. & Schooler, C. : 1983, "Stratification, Occupation, and Orientation", Kohn, M. L. & Schooler, C. (eds.), *Work and Personality: An Inquiry into the Impact of Social Stratification*, Ablex
- Marx, K. : 1894, *Das Kapital* = 1969-1970, 向坂逸郎訳, 『資本論』I~IX, 岩波書店
- 宮島喬：1991, 「文化的再生産論の展開」, 宮島喬・藤田英典編, 『文化と社会—差異化・構造化・再生産—』, 有信堂
- ：1994, 『文化的再生産の社会学—ブルデュー理論からの展開—』, 藤原書店
- 宮島喬・田中佑子：1983, 「女子高校生の進学希望と家族的諸条件—『文化的』環境を中心として—」, 『お茶の水女子大学女性文化資料館報』第5号
- 宮島喬・藤田英典・志水宏吉：1991, 「現代日本における文化的再生産過程—ひとつのアプローチ—」, 宮島喬・藤田英典編, 『文化と社会—差異化・構造化・再生産—』, 有信堂
- 盛山和夫・野口裕二：1984, 「高校進学における学校外教育投資の効果」, 日本教育社会学会編, 『教育社会学研究』第39集
- 盛山和夫・直井優・佐藤嘉倫・都築一治・小島秀夫：1990, 「現代日本の階層構造とその趨勢」, 直井優・盛山和夫編『現代日本の階層構造①—社会階層の構造と過程—』, 東京大学出版会
- 白倉幸男：1993, 「社会階層と自立および知的柔軟性—現代日本の階層構造における地位の非一貫性とパーソナリティ—」, 直井優・盛山和夫・間々田孝夫編, 『日本社会の新潮流』, 東京大学出版会
- 高橋一郎：1990, 「文化的再生産論の再検討」, 『ソシオロジ』第35巻1号, ソシオロジ編集委員会
- ：1991, 「文化資本概念の再検討—教育制度効果をめぐって—」, 『京都大学教育学部紀要』第37集
- 竹内洋：1991, 『立志・苦学・出世—受験生の社会史—』, 講談社（現代新書）

(しみず りょう)